遠藤周作文学の宗教性
―ヴィクトール・フランクルのロゴセラピー（実存分析）を視座として―

（要約）

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：Ｄ１７５１２２
氏　　名：倪　楽飛（ニイ　ラクヒ）

本論文は、〈宗教性〉を中心テーマに、〈実存〉という角度から、現代日本の代表的なキリスト教作家遠藤周作の文学を考察するものである。方法論的に、本論文では主として、実存分析批評という新たな文学研究手法を用いている。この手法は、論者自身がオーストリア精神科医ヴィクトール・フランクルによって提唱された精神療法ロゴセラピーに基づいて構想したものである。

本論文には、「遠藤周作文学の宗教性」を明らかにすること、そして「実存分析批評」の有効性を検証することという二つの大きな課題が託されている。研究対象として、『沈黙』(一九六六)、『死海のほとり』(一九七三)、『鉄の首枷　小西行長伝』(一九七六)、『スキャンダル』(一九八六)、『深い河』(一九九三）という遠藤の中期から晩年までの五つの代表作を中心に据えながら、ほかの小説やエッセイなども適宜取り上げている。構成的に、本論文は四部構成となっており、第一部は理論篇に当たり、第二部から第四部までは実践篇に相当する。理論と実践の相関関係に即していうと、第二部第三部第四部はそれぞれロゴセラピーの理論的三本柱である〈人生の意味〉、〈意味への意志〉、そして〈意志の自由〉に対応している。各部の内的論理性の側面から言えば、第二部では〈単なる自己〉としての〈私〉に注目して分析を行い、第三部では他者としての〈汝〉に焦点を当てて作中人物を考察し、第四部では〈私〉を乗り越えた〈我〉が如何に〈汝〉と出会っていくのかを中心に論考を展開している。

第一部「理論の射程」は、第一章からの三章によって構成される。

第一章「遠藤周作文学研究における実存分析の可能性」では、術語の意味を確認した上で、本論文の中で〈ロゴセラピー〉と〈実存分析〉を区別して使用する根拠を明確にした。フランクルの代表作『夜と霧』の出版、翻訳状況を調査した上で、遠藤がいつこの本と接触したのかを考察した。遠藤の小説やエッセイにおけるフランクルへの言及を確認し、遠藤がフランクルからの影響を受けていることを明白にして、思想面における二人の共鳴を考察した。最終的に、フランクルの思想や言説を援引して遠藤文学研究を行うことは可能であると結論付けた。

第二章「ヴィクトール・フランクルの生涯とロゴセラピー―実存分析批評の可能性①―」では、フランクルのロゴセラピー＝実存分析を一つの文学研究手法にするための基礎付けとして、フランクルの略歴、ロゴセラピーの基本概念を紹介し、「今、ここで」という具体的な状況に置かれる人の〈実存〉を重視するというロゴセラピーの特徴を明らかにした。ロゴセラピーの適用範囲を説明した上で、精神医学及び医学全般におけるロゴセラピーの位置付けや意義について論じた。

第三章「文学研究におけるロゴセラピー＝実存分析の適用―実存分析批評の可能性②―」では、文学研究において、〈実存分析批評〉が如何に可能なのかを考察した。精神分析との比較を通して、実存分析の特徴を明らかにした上で、実存分析批評で文学研究を行う際に、具体的に何をどのようにやるのかを説明した。そして最後に、文学研究に実存分析批評を取り入れる意義について論じた。

第二部「苦悩・意味を求める人々」は、第四章から第六章までの三章によって構成される。

第四章「『死海のほとり』〈巡礼〉における「美しい世界」の意味―フランクル『夜と霧』を手がかりに―」では、遠藤の『死海のほとり』の中の「世界はどうして、こう……美しいんだろう」というフランクルの代表作『夜と霧』から直接引用した言葉を手がかりに、遠藤とフランクルとの接点を確認して、フランクルに対する遠藤の理解がどこまで至っているのかを考察した。

第五章「『死海のほとり』〈巡礼〉における「ねずみ」の人物像―フランクル〈次元的存在論〉を視座に据えて―」では、フランクルの〈次元的存在論〉を用いて、『死海のほとり』〈巡礼〉の部に登場する脇役「ねずみ」の人物像を考察した。従来の研究においては弱者の代名詞とされているポーランド人修道士「ねずみ」が果たして弱者のまま死んだのかを問い直し、実存の視点から彼の苦しみや寂しさの深層を探り、精神次元の深いところに潜む彼の魂の渇望を明らかにした。

第六章「『鉄の首枷　小西行長伝』における「面従腹背」―実存の視点から見る行長の生き方―」では、本作に描かれた小西行長の人生の歩みを確認しながら、精神分析と実存分析両方の理論を援引して、「弱者」と「野心家」という二つの顔を同時に持っている行長の深層心理を分析した。特に、実存分析の〈次元的存在論〉を用いて行長の「世俗的野心」と「実存的欲求」を捉え直し、彼の「面従腹背」の真実や、弱さと強さの真相、そして「鉄の首枷」の真意をより明白にした。

第三部「実存・他者へのまなざし」は、第七章からの四章によって構成される。

第七章「『沈黙』におけるイエスの「顔」―他者の呼びかけに応えて―」では、『沈黙』のクライマックスで、主人公ロドリゴに聞こえた「踏むがいい」という神が発した言葉を如何に捉えるべきかを中心に論を展開している。レヴィナスの他者論を補助線として神の「顔」が如何に次第に変化したのかを考察し、「踏むがいい」という声が〈他者〉からの呼び掛けであったことを論証した。そして、ロドリゴが踏絵を踏んだ行為の深い意味を、実存分析の視点から分析した。

第八章「『スキャンダル』における〈悪の問題〉―Ｖ・フランクルとＥ・フロムの言説を手がかりに―」では、『スキャンダル』に託された〈悪の問題〉を考察した。実存分析批評の立場から、遠藤文学に頻りに出てくる〈罪〉の概念の本質を確認した上で、遠藤が書こうとした〈悪〉の意味を分析した。本作の中の〈悪〉は、エーリッヒ・フロムの〈ネクロフィリア〉という概念に由来するものであると論証した。それを踏まえて、「スキャンダル」が普遍的に人間の無意識の深層に宿る「躓き」の可能性であり、何人でも直面しなければならない試練を意味するものであることを指摘した。

第九章「『スキャンダル』における勝呂の人物像①―実存分析の視点から見る勝呂の心理・精神状態―」では、実存分析の視点から、主人公勝呂がなぜ〈悪の問題〉にぶつかったのか、彼の「分身」が何を意味するかを明らかにした。ロゴセラピーにおける〈強迫神経症〉及び〈過剰自己観察〉という概念で勝呂に見られる「異常」を再解釈した。

第一〇章「『スキャンダル』における勝呂の人物像②―運命・実存・救いの所在―」では、前章の結論を踏まえた上で、〈悪の問題〉にぶつかった勝呂の救いの可能性がどこにあるのかを考察した。結論として、〈ネクロフィリア＝悪〉の強迫観念による〈強迫神経症〉的な悪循環に陥っている勝呂は、〈悪〉の深淵に落ちていくという窮境から自力で脱却することが不可能であり、彼は自分の妻、森田ミツ、そして神という他者に目を向け、その呼びかけに耳を傾けることを通してはじめて、救いの可能性が見えてくることを論証した。

第四部「自己超越・無意識的宗教性」は、第一一章と第一二章によって構成される。

第一一章「『深い河』における成瀬美津子の人物像①―実存の視点から見る美津子の〈悪〉と〈空虚感〉―」では、『スキャンダル』の主要登場人物成瀬夫人の苗字と共に〈悪の問題〉を引き継いだ『深い河』の女主人公成瀬美津子の人物像を考察した。『スキャンダル』との比較を通して、『深い河』の美津子に見られる〈悪〉の本質をより明らかにした。また、〈人格〉を中心概念としつつ、〈主体性〉、〈演技〉、〈虚しさ〉など幾つかの側面から美津子の〈実存〉を分析し、人間性心理学及び場所論を補助線として、彼女を引き付けるインドの女神カーリーが何を意味するのかを解明した。

第一二章「『深い河』における成瀬美津子の人物像②―〈我―汝〉の関係における神の働き―」では、実存分析の理論を用いて、前章で論じた〈人格的主体性〉、人生の次元における〈大きな意味〉、そして〈根源的な親〉という三つの〈原事実〉の相互関係を明らかにした。その上で、大津の人生の軌跡を確認することを通して、〈根源的な親〉の愛の本質を分析した。大津に対する分析を通して、『深い河』において、神がどのように美津子に働きかけるのかを説明した。〈我―汝〉の関係において、美津子と大津の何回かの交流を考察して、美津子の身には一体何かどのように起こっているのかを分析した。

跋「遠藤周作文学の宗教性―実存分析批評の視点から―」では、本論文の各章の内容をまとめ、各部ごとにその結論と意義を総括的に述べた。また、全体的に、実存分析の理論的三本柱に対応する各部がどのように関連して、どのように支え合うのかを明らかにした。その上で、実存分析の視点から、遠藤周作文学の宗教性がどのように見えてくるのかについて、最終的な結論を出した。

実存分析批評の実験的使用を通じて、本論文では遠藤周作文学の宗教性に対する解釈に新たな視点や可能性を提示した。また、本論文では、実存分析批評は心理学の側面から考察対象たる人物にアプローチする手段として、これまで盛んに使用されてきた精神分析に勝る有効性を持っていると同時に、立体性や開放性などの特徴を有しており、人物の心理次元に止まらず、精神次元・実存の次元にまで掘り下げ、人間存在の真実を示すことができる方法論である、ということを検証した。